

キャリア形成プロセスにおける 格差の男女比較研究

——無業経験に着目して

麦山 亮太 (mugiyama@l.u-tokyo.ac.jp)

東京大学大学院人文社会系研究科

社会学専門分野博士課程

修論目次

序章

第1章 無業経験の位置づけ

第2章 無業経験の偏りとその帰結

第3章 方法——無業経験という変化を捉える

第4章 誰が無業を経験するのか

第5章 無業経験と階級間移動

第6章 無業経験が正規雇用獲得に与える影響

第7章 無業経験後の賃金の低下

終章

修論目次

序章

第1章 無業経験の位置づけ

第2章 無業経験の偏りとその帰結

第3章 方法——無業経験という変化を捉える

第4章 誰が無業を経験するのか

第5章 無業経験と階級間移動

第6章 無業経験が正規雇用獲得に与える影響

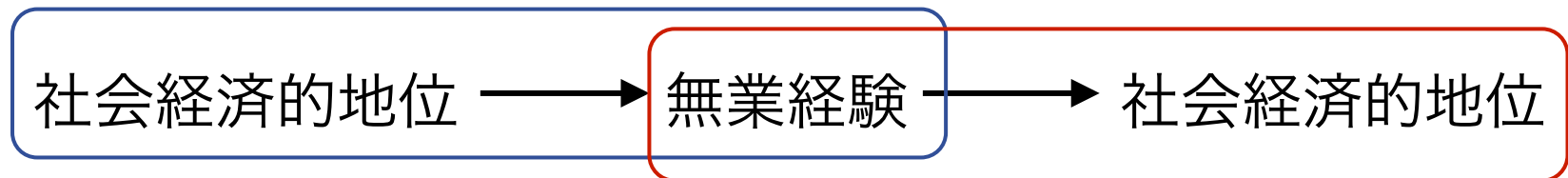
第7章 無業経験後の賃金の低下

終章

研究目的

無業経験という題材を通して、**キャリア形成プロセス**における格差を**男女を比較**しながら明らかにする。

図 本研究で検討される関連



社会経済的地位が
無業経験の生起に
与える影響（第4章）

無業経験がその後の
社会経済的地位に
与える影響（第5-7章）

本研究における用語の定義

無業経験

個人が労働市場からの退出（有業から無業となる）を経験すること。とくに、学校教育終了後から退職期までの働き盛りの期間に生じるものを扱う。

社会経済的地位

個人が労働市場において有する地位。

*個人のキャリアとそれにともなうライフチャンスの変化に関心があるため。

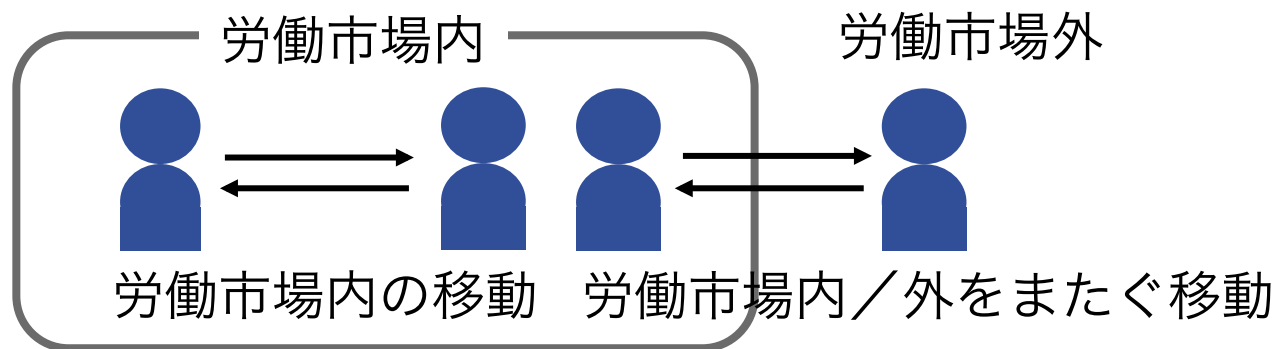
社会階層研究におけるキャリア

社会階層の生成過程 | 親階層→学歴→**初職**→**現職**

初職と現職の間の内部のプロセス＝キャリア形成過程

キャリアのなかで「無業」をいかに位置づけるか？

従来の研究は、労働市場内の移動に焦点を絞るか、労働市場内→外、外→内の移動をそれぞれ別個に分析してきた



経済的リスクと無業経験

無業経験＝労働市場外を経由する移動をともなうイベント

無業経験は、

- それ自体が個人の労働市場における社会経済的地位を失わせるとともに、
 - キャリアを中断させ、その後のキャリア形成を（中長期的に）不安定化させる経済的リスクと捉えられる
- 無業経験が社会階層により不平等に配分されているのか？
- 無業経験がいかに不平等を生成するのか？

男女比較の意義

社会階層研究とジェンダー

女性の労働供給は、労働市場だけでなく、家族（世帯）の影響を強く受ける

キャリアは男女で異質であるという前提

男性 | 学校教育終了後、高齢となって退職するまで働きつづける、連続的なキャリア

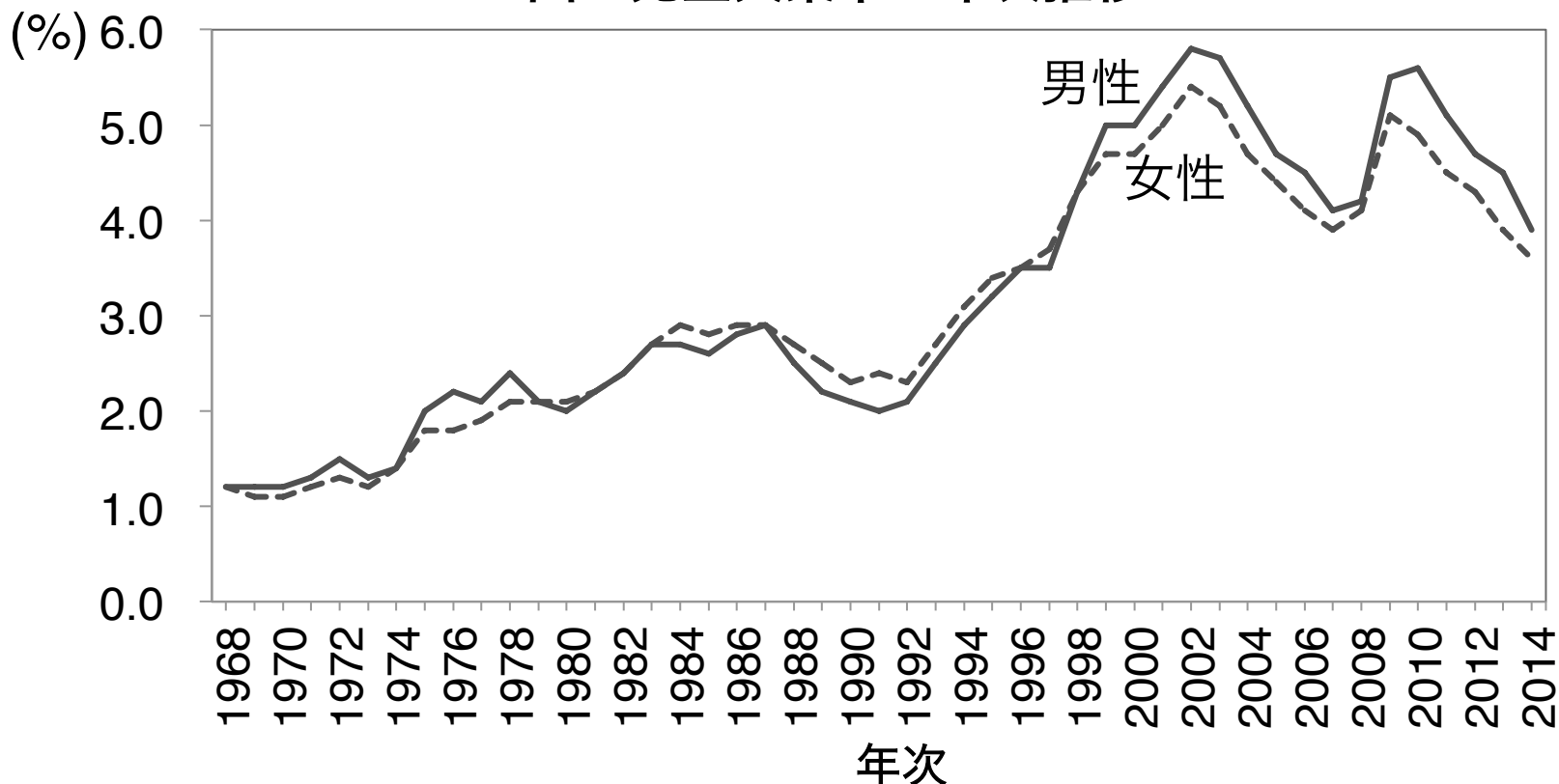
女性 | 結婚・出産期に労働市場を離れ、その後は就業しないか周辺の労働市場に参入する、断続的なキャリア

→ 何が男女で共通しており、何が異なるのか？

失業率の高まり

90年代以降の経済停滞を背景に、男女とも失業率が上昇している

図 完全失業率の年次推移

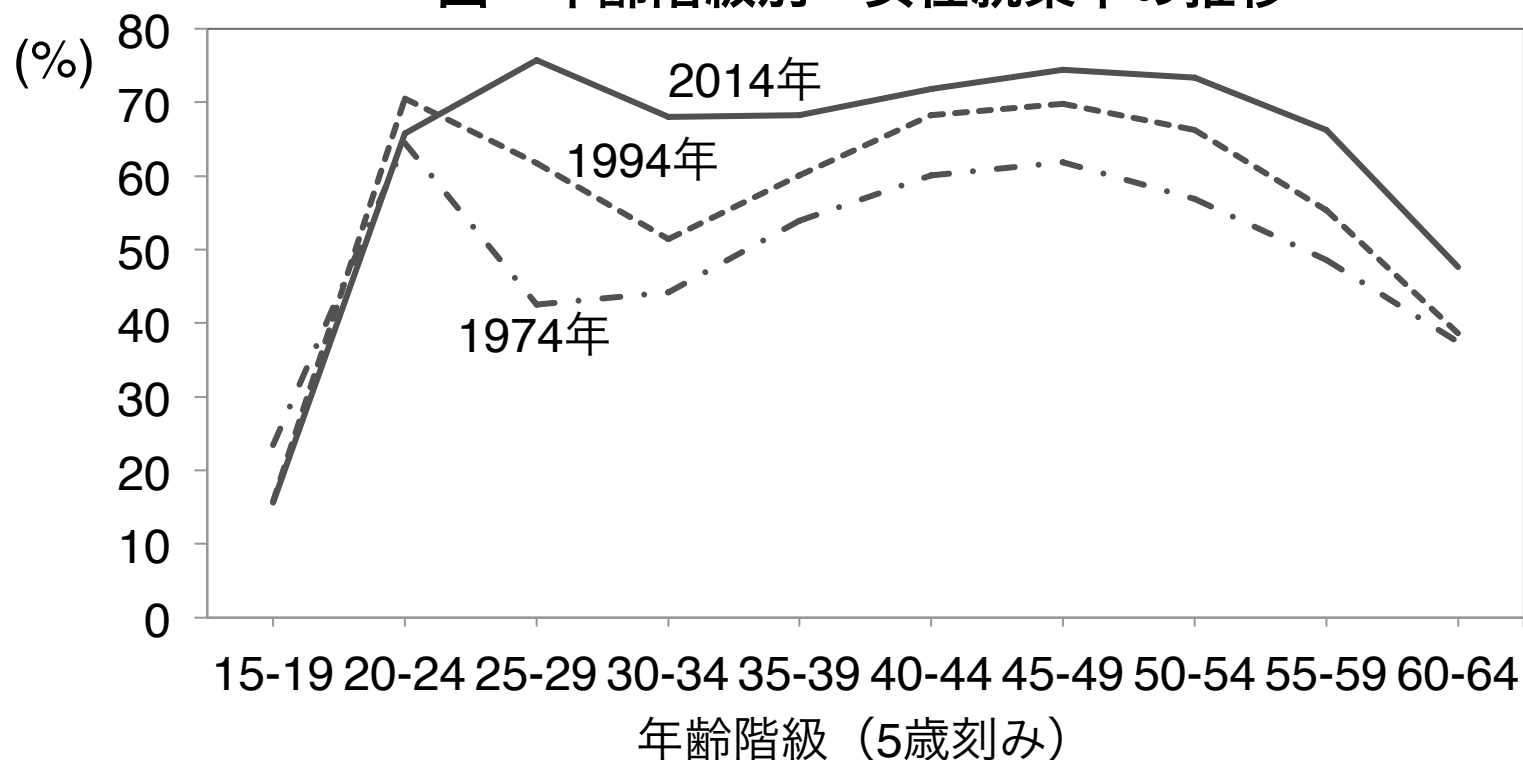


出所) 「労働力調査 長期時系列データ」 (総務省統計局) を加工して作成

女性就業の増加

女性の就業中断は減少していないものの、再就業は増加傾向にあり、労働市場に長く留まる女性は増えつつある

図 年齢階級別・女性就業率の推移



出所) 「労働力調査 長期時系列データ」(総務省統計局) を加工して作成

無業経験の重要性

- 近年の経済停滞のなかで、男性であっても、無業経験のリスクは高まりつつある
- 女性の就業中断の減少傾向は見られないが、就業中断後の再就職は増加している



男女とも、キャリアのなかで「無業経験」が生じるようになってきているといえる

修論目次

序章

第1章 無業経験の位置づけ

第2章 無業経験の偏りとその帰結

第3章 方法——無業経験という変化を捉える

第4章 誰が無業を経験するのか

第5章 無業経験と階級間移動

第6章 無業経験が正規雇用獲得に与える影響

第7章 無業経験後の賃金の低下

終章

社会経済的地位→無業経験

理論的背景

分断労働市場論

経験的研究

- **失職 (Job loss)** | ある仕事を離れ、無業となること。欧米における研究蓄積
- **離職 (Job exit)** | ある仕事を離れること（行き先を特定していない）。日本の社会階層研究における研究蓄積
- **女性の就業中断** | 結婚・出産期に焦点を当て、就業中断／継続の規定要因に関する研究の蓄積

無業経験→社会経済的地位

理論的背景

人的資本理論、シグナリング理論、ジョブ・サーチ理論

経験的研究

- **失業・無業の傷跡効果 (scar effect)** | 欧米における研究蓄積。失業・無業が、その後のキャリアに長期的に負の影響をおよぼす
- **転職の帰結** | 労働経済学を中心とした蓄積。転職の際に長い無業期間を挟む場合に賃金の低下がみられる
- **結婚・出産ペナルティ** | 結婚・出産にともなって生じる女性の賃金の低下の多くは就業中断によって説明される

本研究の貢献

1. 労働市場における移動のなかでも、**無業という行き先を特定化**し、社会経済的地位の効果を分析する
2. 無業経験が**短期的・長期的**にその後のキャリアにおよぼす影響を検討する
3. 以上の点につき、**男女の比較分析**を行う

分析枠組み

1. 時間を考慮した分析

イベントヒストリー分析およびパネルデータ分析（固定効果・ランダム効果モデル）といった縦断的分析を利用したモデルの適用

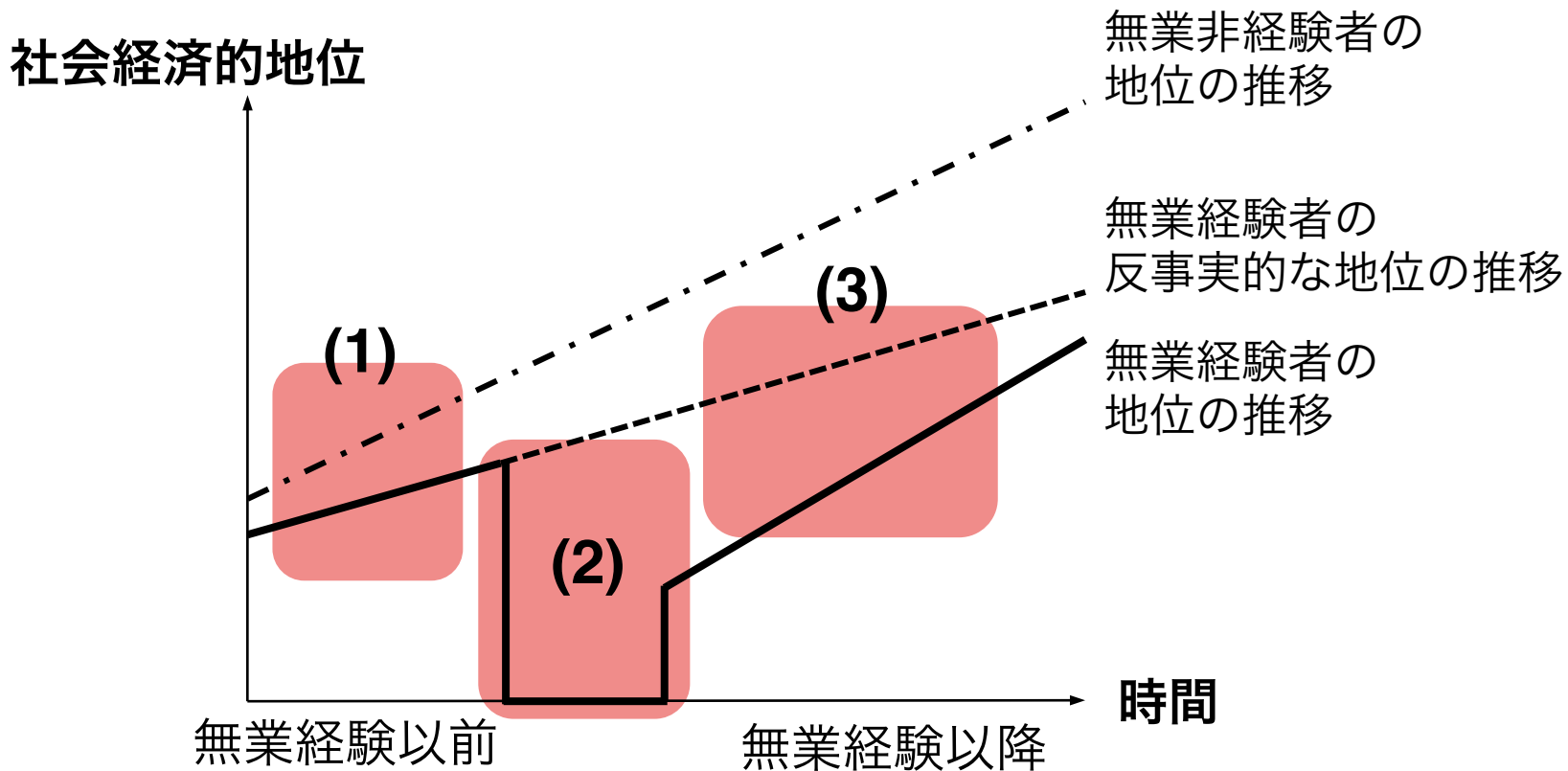
2. 社会経済的地位を多元的な指標で測定

無業経験がその後の社会経済的地位に与える影響を測定する際、階級・雇用形態・賃金の3つの指標を用いる

3. 同一のモデルによる男女比較

何が男性（女性）特有の特徴であり、何が共通しているのかを明らかにする

時間を考慮した分析



- (1) 無業経験リスクの格差 → 第4章
- (2) 無業経験直前と直後の変化 → 第5章
- (3) 無業経験による地位の低下の持続性 → 第6,7章

社会経済的地位を多元的な指標で測定

階級

雇用関係と被雇用者／雇用主の違いに着目するEGP階級分類（専門管理、事務販売、自営、熟練ブルー、半非熟練ブルー）を使用 → 第5章

雇用形態

従来の階級では捉えきれない労働市場の分断である正規雇用／非正規雇用 → 第6章

賃金

労働に対して与えられる報酬として最も一般的な指標。賃金の多寡は地位の高さの代理指標として考えられる → 第7章

同一のモデルによる男女比較

- 男女それぞれで、**同じ変数を投入したモデルを適用し**、その結果を比較する
- 無業経験の規定要因、無業経験の効果は男女で共通しているか、なにが異なっているか？
- 年齢・ライフステージによる規定構造・効果の違いへの着目

用いるデータ

2005年社会階層と社会移動全国調査 (SSM2005)

2005年9月30日時点で満20~69歳の男女を母集団とし、訪問面接・留置調査によりデータを収集。サンプルサイズは5742 (有効回収率44.1%) → 第4~6章で使用

東大社研・若年壮年パネル調査, wave1~6 (JLPS2007~2012)

2007年時点で20~40歳の男女を母集団とし、郵送調査・訪問回収によりデータを収集。以降、1年に1回のペースで継続的に調査を実施。w1時点のサンプルサイズは4800 (回収率は20~34歳で34.5%, 35~40歳で40.4%) → 第7章の分析で使用

修論目次

序章

第1章 無業経験の位置づけ

第2章 無業経験の偏りとその帰結

第3章 方法——無業経験という変化を捉える

第4章 誰が無業を経験するのか

第5章 無業経験と階級間移動

第6章 無業経験が正規雇用獲得に与える影響

第7章 無業経験後の賃金の低下

終章

第4章の分析

目的

社会経済的地位によって、無業となるリスクは異なるかどうかを、男女を比較しながら検討する。

方法

データ | 2005年SSM調査

手法 | イベントヒストリー分析（離散時間ロジットモデル）

分析対象 | 15~59歳、有業のパーソン・ピリオドデータ

従属変数 | 無業（3ヶ月以上）への移動

第4章分析結果

社会経済的地位によって無業となりやすさは異なるが、男女差がある

男性 | 非正規雇用・小企業勤務といった**低い社会経済的地位**において無業への移動が生じやすい。

女性 | 社会経済的地位の影響は限定的。

ライフステージによる規定構造の違い

男性 | 結婚や子どもをもつことは無業への移動を起こりにくくする。またこれによって社会経済的地位の影響のパターンは変化しない。

女性 | 結婚や子どもをもつといったライフステージの変化がより重要な要因であり、これによって**社会経済的地位の影響のパターンが変化**する。

第5章の分析

目的

いったん無業となった場合にどのような階級へと移動するのか、またそれが無業となる以前の階級とどのように関係するかを、男女を比較しながら検討する。

方法

データ | 2005年SSM調査

手法 | ログリニア・モデル、離散時間多項ロジットモデル

分析対象 | 15~59歳、無業のパーソン・ピリオドデータ

従属変数 | 労働市場への再参入（EGP階級分類に従い、専門管理、事務販売、自営、熟練ブルー、半非熟練ブルーの5カテゴリを作成）

第5章分析結果

無業経験直前と直後で、半分以上が異なる階級に所属する

男性 | 専門管理・事務販売・熟練ブルーは以前の階級と同じ階級に再参入しやすい

女性 | **専門管理**において無業経験直前と直後の階級がとくに一致しやすい

年齢とライフステージの効果

男性 | **年齢が高いと再参入が難しくなり**、半非熟練ブルーへの再参入が促される

女性 | 年齢の効果はみられず、子どもの有無が重要

第6章の分析

目的

無業経験がその後の正規雇用獲得にどのような影響を与えるかを、男女を比較しながら明らかにする。

方法

データ | 2005年SSM調査

手法 | 固定効果・ランダム効果ロジットモデル

分析対象 | 15~59歳、有業のパーソン・ピリオドデータ（自営・家族従業を除く）

従属変数 | 雇用形態（正規雇用／非正規雇用）

第6章分析結果

無業経験は男女ともその後の正規雇用獲得確率を20年近くにわたって低い状態に持続させる

男性 | 時間が経過しても格差は縮まらない

女性 | 時間が経過するにつれて格差が縮まる傾向

壮年期における影響の大きさ

男性 | **35歳以上の壮年期**に無業を経験した場合、若年期と比較して負の効果は顕著に大きい

女性 | 年齢による差は小さいが、壮年期に無業を経験した場合は格差の縮小傾向がやや小さい

第7章の分析

目的

無業を経験することがその後の賃金をどの程度持続的に低下させるかを、男女の違いに着目しながら明らかにする。

方法

データ | JLPS2007~2012

手法 | 固定効果モデル

分析対象 | 有業のパーソン・ピリオドデータ

従属変数 | 時間あたり賃金（勤労所得を労働時間で除して算出）

第7章分析結果

無業経験による賃金の低下は観察期間中は持続する

女性よりも男性のほうが賃金の低下は若干小さい傾向(?)

壮年期における影響の大きさ

男性 | **35歳以上の壮年期**に無業を経験した場合、若年期と比較して顕著に賃金が低下する

女性 | 年齢による効果の違いは見られない

修論目次

序章

第1章 無業経験の位置づけ

第2章 無業経験の偏りとその帰結

第3章 方法——無業経験という変化を捉える

第4章 誰が無業を経験するのか

第5章 無業経験と階級間移動

第6章 無業経験が正規雇用獲得に与える影響

第7章 無業経験後の賃金の低下

終章

無業経験と累積する不利

男性 社会経済的地位 \longrightarrow 無業経験 \longrightarrow 社会経済的地位

女性 社会経済的地位 \dashrightarrow 無業経験 \longrightarrow 社会経済的地位

累積する不利 (cumulative disadvantage)

男性において社会経済的地位と無業経験の関連が強い \rightarrow 無業経験を媒介として、労働市場における社会経済的地位の格差が拡大する

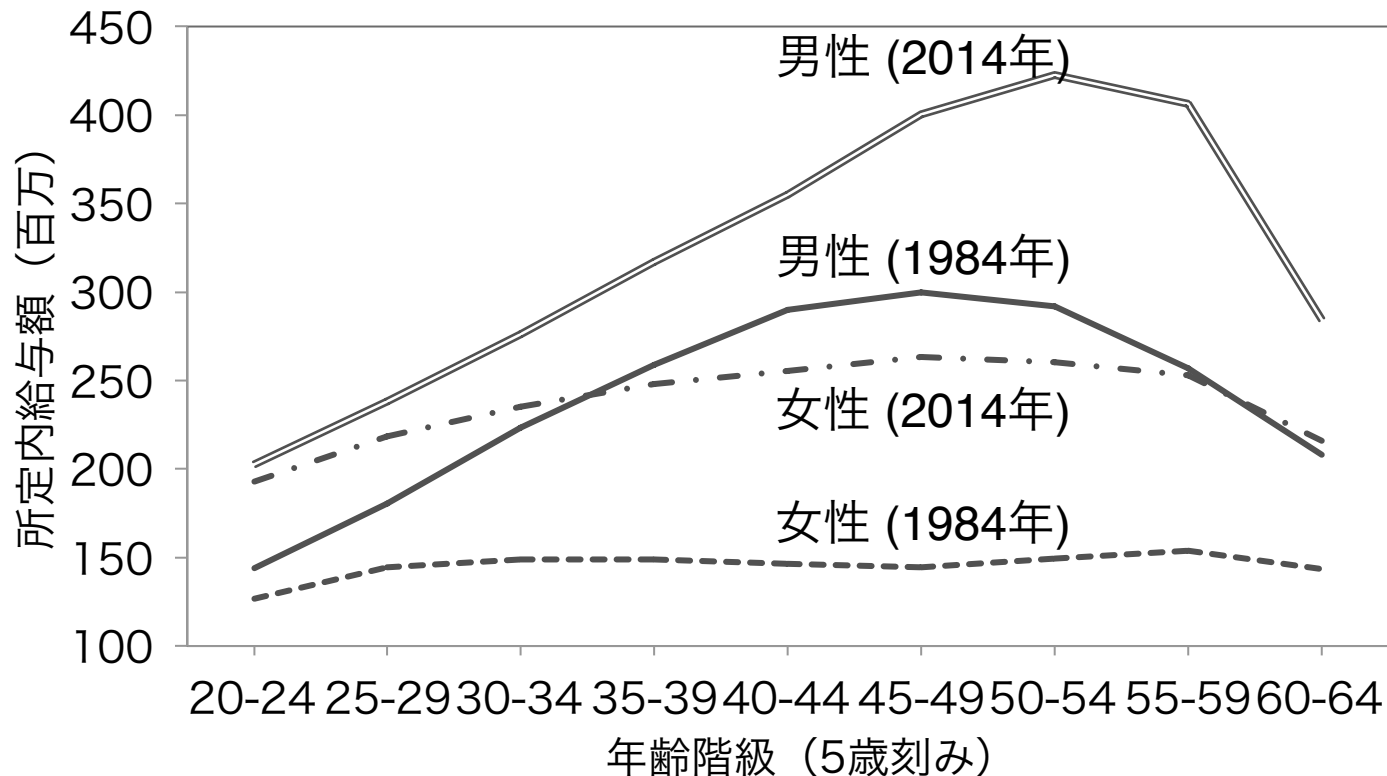
今後、女性の経済的地位の向上のなかで、女性のキャリアにおいても累積する不利のプロセスが観察される可能性

年齢による異質性と男女差

無業経験の効果は、とくに男性壮年層において大きい

→ **男女のキャリア形成プロセスの分断**

図 性別・年齢階級別所定内給与額（一般労働者、1984, 2014年）



労働市場・家族の影響と男女差

キャリアを取り巻く構造としての労働市場と家族

労働市場の階層性

- 正規雇用／非正規雇用、大企業／小企業という階層性は、男性のキャリアを捉える際に重要な要因
- 女性は全体として周辺的な労働市場に置かれているために、労働市場の要因が検出されにくい

家族の影響の非対称性

- 配偶者・子どもをもつことは女性のキャリア形成を不利にする一方、男性のキャリア形成を有利にする (例：無業への移動を抑制する)

無業経験の分析が拓く新たな研究視角

図 従来の研究枠組み

無業経験	男性	女性
なし	A	C
あり	B	D

- 男性 = A、女性 = Dという前提
- 男性 = Aと女性 = Dの間の格差 (男女間格差) への着目

図 本研究の提示した枠組み

無業経験	男性	女性
なし	A	C
あり	B	D

- AとB、CとDとの比較
- A-B間、C-D間の格差の現われ方の違い (同性内格差の性別による異質性)

- 本報告は2015年12月に提出した東京大学大学院人文社会系研究科社会学専門分野修士課程修士学位論文の概要に関するものである。
- 修士論文執筆にあたりご指導・ご鞭撻いただいた皆様、とくに白波瀬佐和子先生、藤原翔先生、有田伸先生、高橋康二先生、福井康貴先生、永島圭一郎氏、西澤和也氏、打越文弥氏、東京大学計量社会学研究会の参加者諸氏に感謝申し上げます。
- 全文の閲覧を希望される方は、麦山までご連絡先をお伝えいただければ、本文のpdfファイルをお送りいたします。